

地域に住む様々な人々と協働して、課題解決に向けて、自ら工夫し創造する生徒の育成

～地域の方との交流や体験を通して～

千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会第5分科会

鎌ヶ谷市立第四中学校 椎名 美緒

野田市立川間中学校 佐藤 優香

1 はじめに

近年の日本において少子高齢化が進み、令和2年度の高齢化率は28.9%になった。(※1) 鎌ヶ谷市の高齢化率は28.5%(※2)、野田市の高齢化率は30.7%(※3)で、国と大きく変わらない数値である。また、令和2年度の国勢調査では、三世代世帯の割合が9.4%と減少している。高齢化率は高くなっているのに比べて、三世代世帯は減少しており、高齢者と生活するなど高齢者との関わりの強い世帯は減っていると考えられる。

学習指導要領では、内容「A家族・家庭生活」において、少子高齢社会の進展に対応して、高齢者など地域の人々と協働することについての内容が新設された。ここでは、家庭や地域との連携を図り、人と関わる活動を充実することにより、生徒が家庭生活や地域を支える一員であることを自覚できるようにすることが求められている。

ここから、生徒が地域の人々と関わり、協働する方法についての課題を解決できる力を身に付ける必要があると考えた。そのために、生徒には、地域には様々な世代の人々が生活しており、その人々に支えられながら生活しているということについて理解できるようにした。その上で、生徒が普段関わりの少ない地域の人々と交流を行い、中学生に期待されていることなどと直接伺う機会を設け、地域の人々と関わるよさを実感することが必要ではないかと考え、研究テーマを設定した。

2 生徒の実態

本研究を進めるにあたり、鎌ヶ谷市内の第二学年の生徒へアンケートを実施した。「地域の人々との交流がととてもある」と回答した生徒は6.3%で

「祖父母と同居している」と回答した生徒は16.8%であった。また、「親族以外の高齢者との交流がある」と回答した生徒は28.2%であったが交流の内容としては、「挨拶」と回答した生徒が大多数を占めた。

また、「あなたが『高齢者』と聞いてイメージすることは？(複数回答可)」の問いに対しては「知識が豊富」のようなポジティブな回答が21%見られた一方で、「身体的に不自由になること」のようなネガティブな回答が36%見られた。

このことから、高齢者と同居している生徒は全国の三世代世帯の割合に比べると多かったが、地域や高齢者との関わりが挨拶以外にある生徒は少なく、高齢者に対して抱くイメージがネガティブな傾向であることも分かった。

3 目指す生徒像

地域の人々と協働するために、自ら課題を設定し、その課題を解決するために実践しようとする生徒

4 研究仮説

- (1) 地域の人々と交流したり、高齢者疑似体験を行ったりすることで、地域の人々と協働することの大切さに気付くだろう。
- (2) 問題解決的な学習を取り入れ、授業展開を工夫し、ワークシートやICT機器を活用することで、自ら設定した課題の解決に向けて主体的に取り組むことができるだろう。

5 研究内容

(1) 地域の人々との交流や、高齢者疑似体験の実施

① 高齢者疑似体験

地域には「見守りが必要な高齢者」と「活動する高齢者」がいることから、まずは「見守りが必要な高齢者」の多くが抱える高齢者の身体的な特徴を理解した上で、地域の人々との関わり方を工夫する必要があると考えた。そこで、高齢者疑似体験を行うこととした。

高齢者疑似体験は、高齢者疑似体験キットを用いるなどして実施した（〔図1〕）。

高齢者疑似体験キットでは、白内障を体験するゴーグルの装着や、膝や肘関節の動きにくさを体験するサポーター、指先の感覚の衰えを体験する手袋など、様々な装具を身に付け、高齢になったときの運動機能や感覚の変化を体験できるようにした。このとき同時に立ち上がりや歩行などの介助の方法についても扱った。



〔図1〕 高齢者疑似体験の様子

② 地域の人々との交流

地域の人々と協働することの大切さに気付くようにするためには、地域の人々の思いを直接聞くことが必要であると考えた。そこで、地域の人々と交流する機会を設けた。今回は、鎌ヶ谷市の高齢者支援課に依頼し、地域の人々をゲストティーチャーとして学校に招くこととした。ゲストティーチャーは「活動する高齢者」を各校4～6名招き、生徒と交流できるようにした（〔図2〕）。交流の際は、「活動する高齢者」はどのような生活を送っているのか、困っていることはないか、などを生徒が聞き取るようにした。さらにゲストティーチャーからは、地域の人々が中学生に求めていることを語ってもらうようにすることで、地域の人々の思いを直接聞けるようにし、地域の人々と協働する必要性に気付けるようにした。



〔図2〕 地域の人々との交流の様子

(2) 問題解決的な学習

① 授業展開の工夫

生徒が、地域の人々との関わりについての問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けて主体的に学習に取り組めるようにするために、次のように授業展開を工夫した（〔資料1〕）。

授業展開

■第1・2時

- ・地域に住む人々の特徴を知る。
- ・地域の公共施設が地域の人々のために工夫されている点を考える。
- ・地域には多様な人々が協力し合いながら暮らしていることに気付く。

■第3時

- ・高齢者疑似体験を行う。
- ・高齢者の身体の特徴を理解する。

■第4時

- ・地域の人々と交流する。
- ・地域の人々と協働する必要性に気付く。
- ・地域の人々との関わりについての問題を見いだして課題を設定する。

■第5時

- ・設定した課題を解決するための実践計画を立てる。
- ・各自の計画を検討し合う。

◇課外

- ・各自の実践計画に従い、実践活動を行う。

■第6時

- ・各自の実践を発表し、評価し合う。
- ・各自の実践を振り返り、改善する。
- ・これからの生活に生かしていきたいことを考える。

〔資料1〕 授業展開の工夫＜全6時間展開＞

<課題>

高齢になっても暮らしやすい地域にするには何ができるだろうか。

<課題設定理由>

地域の公共の施設の工夫を学んだり、高齢になると足腰が不自由になったりするということを学んだ。また、地域の人々との交流で高齢になっても鎌ケ谷に住みたいということを地域の方から聞き、高齢になっても住み続けられる街にするにはどのような工夫があったらよいのかと思ったから。

② ワークシートの工夫 <授業デザイン⑥>

生徒が問題解決的な学習の中で、課題の解決に向けた見通しをもつとともに、自己の学習活動を振り返りながら学習に取り組めるようにするためにワークシートを工夫することにした。

以前は1人1台端末を利用した振り返りを行っていたが、振り返りの際は、その時間の振り返りを入力する画面のみが表示されるため、課題を解決する過程を振り返る生徒は少なかった。そこで、生徒が課題を解決していく過程を1枚のワークシートにまとめられるようにすることで、生徒自身が課題を解決していく過程を見通し、振り返ることができるようにした。

また、学習前の考えと学習後の考えの変化が一目で分かるようにするなど「思考の見える化」を図るようにした。

そして、実際の授業では毎時間必ず振り返りの場面を設け、自分の課題に対する振り返りを行うようにした〔図3〕。

実践計画を立てる場面では、課題の解決に向けた方向性や、実践内容について検討できるようにするために、友達からのアドバイスを記入できる欄を設けた。これにより、自分の実践計画を見直すことが難しい生徒が、友達からのアドバイスによって計画をよりよいものにすることができるようになった。と考えた。

〔図3〕 振り返りのワークシート

③ ICT機器の活用 <授業デザイン④>

班や学級の考えを共有しやすくするためにはICT機器の活用が効果的であると考えた。また、高齢者の身体的な特徴をまとめる場面など、言葉で伝えるだけでは理解が難しい内容に関しては、大型提示装置を活用した。

他にも、高齢者の身体的な特徴の一つである聴力については、Webサイトを利用した疑似体験を行うなど、実感を伴った理解を深めるためのツールとして活用することにした。

各自の実践計画を立てる際、1人1台端末を自由に使い、自分で必要な情報を得るなど、個別の課題に応じて学習できるようにした。また、生徒の実践報告は1人1台端末を活用してスライドショー形式で行うことで、相手に分かりやすく伝えたり、発表したりできると考えた〔図4〕。



〔図4〕 スライドショー形式の発表の様子

6 おわりに

(1) 研究の成果

① 地域の人々との交流や高齢者疑似体験の実施について

生徒は高齢者疑似体験を通して、「普段目にしている高齢者が速く歩けない理由が分かった」

「祖父母に遠くへ出かけようと誘っても敬遠されてしまう理由が分かった」などと、自分の経験と結び付けるなど、中学生とは異なる高齢者の身体の特徴を理解し、これを踏まえて関わる必要性に気付くことができた。

また、地域の人々との交流では、「地域で見かけたら、話しかけてほしい」「地域の行事に参加してほしい」など、地域の人々の思いを直接聞くことができた。

生徒は交流を通して、「もっと気軽に話しかけてみようと思った」「中学生も行事に参加してもいいんだと思った」などの感想をもった。

さらに、「地域の人々は、いつも私たちの生活を見守ってくれていることが分かった」「中学生はもっと地域の人々と関わった方がよいのではないか」など、地域の人々と協働することの大切さに気付くことができた。

これらの活動を通して、地域のために中学生の自分ができることはほとんどないと考えていた生徒が、具体的にできることを考えて実践しようとする姿につながったと考えられる。

② 問題解決的な学習について

題材を通して、常に生徒が設定した課題に立ち返りながら学習を進めていくことで、生徒は自分の課題を意識しながら主体的に取り組む姿が見られた。

また、ワークシートを1枚にし、題材を通して課題を解決していく過程を振り返りながら自分の考えをまとめていくことで、「次の時間は地域の人々と関わる方法を考えたい」など、課題の解決に向けた見通しをもつことができた。

加えて、「今までは、地域の人々のことは考える機会がなかったけれど、中学生の自分でも地域のためにできることはあるし、地域の人々から『ありがとう』などと言ってもらえて嬉しかった。これからも、地域の人々のために自分

ができることに取り組んでいきたい」など、これからの生活をよりよいものにしようと工夫し創造する生徒の姿が見られた。

(2) 今後の課題

① 地域の人々との交流や高齢者疑似体験の実施について

高齢者疑似体験は学校で実施したため、実際に高齢者が生活している環境とは異なり、高齢者が日常感じている苦労や不便さについて実感を伴うことが難しかった。高齢者疑似体験が生徒にとってより高齢者の生活を実感できるようにする手立てを考えていきたい。

地域の人々との交流の際、ゲストティーチャーによって生徒に語ってもらう内容に大きな差が生じてしまった。これは、ゲストティーチャーに題材のねらいや授業の趣旨を伝え、どのようなことを中学生に語ってもらうか、打ち合わせが十分にできていなかったことが原因であると考えられる。ゲストティーチャーを招く際は事前にしっかりと打ち合わせをしておく必要があると感じた。

② 問題解決的な学習について

生徒が課題を解決していく過程が見える1枚のワークシートは有効であったが、それを評価と十分に結び付けていくことができなかったのも、さらにワークシートの形式等について改善を図っていきたい。

I C Tの活用については、生徒の課題を解決する過程の中で、より効果的な活用方法を探っていきたい。

7 引用・参考文献

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説
技術・家庭編 文部科学省

※1 内閣府令和4年版高齢社会白書（全体版）

※2 第8期 鎌ヶ谷市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画（案）

※3 野田市シルバープラン第7期計画第2章